

新型コロナウイルス

子どものいのち

本願寺派総合研究所

上級研究員 岡崎 秀麿

新型コロナウイルス感染症の拡大にともなって生じた問題の中で、「子どものいのち」に関わる問題を二つ取り上げたいと思います。

一つは、いじめです。新型コロナウイルス感染症拡大を防止するためさまざまな努力がなされましたが、その努力が行き過ぎてしまうような事例が見られました。「あの店は営業している」「県外ナンバーの車が走っている」「マスクをしていない!」といった不寛容、患者やその家族への誹謗中傷があったことが多く報道されました。また、「コロナ自警団」という言葉までが現れたように、「自粛要請」をはじめとする社会の動きに従わない企業や人々に対して、暴力的な言動がなされるまでにいたりしました。こうした暴力的な面は不安と隣り合わせではないでしょうか。

長い休校措置の後、小学校・中学校など教育機関は徐々に再開され、日常が取り戻され始めました。しかし、新型コロナウイルス感染症は完全に終息したわけではありません。仮に一人の子どもの感染が判明したら、どうなるのでしょうか。授業も部活も学校行事もすべてが中止の方向に向かうかもしれません。誰もが新型コロナウイルス感染症に罹患する可能性は否定できないという不安を抱えています。しかし、「誰か」のせいでもたまたま制限された生活へと逆戻りしたとするならば、その「誰か」に剥き出しの暴力が向けられてしまう。「誰か」がいじめの対象となってしまうかもしれません。このことは医療従事者の子ども、家族にとって、とりわけ大きな問題だといえます。

こうした状況は起こってみなければわからないことかもしれません。しかし、起こってしまってからでは遅いことも間

違いありません。だからこそ、「あらゆる子ども」が不安と暴力にさらされないよう、社会、地域、大人が注意深く見守る必要があるように思います。

もう一つは、「まだ産まれてないいのち」です。親が育てられない乳幼児を受け入れる「このとりのゆりかご（赤ちゃんポスト）」を運営する熊本市の慈恵病院が5月11日、衝撃的な発表を行いました。それは、4月に同病院に寄せられた中高生からの妊娠相談が過去最多75件に上ったという発表であり、その背景に同病院の蓮田健副院長は新型コロナウイルス感染症拡大にともなう休校措置があるのではないかと指摘されていました。

報道で「望まない妊娠」と表現されるような妊娠をしてしまった中高生が中絶を決断した場合、その子はそのまま何事もなかったかのように学校生活を送れるのでしょうか。一方で出産を決断したならば、その子は学校生活と育児を両立しなければなりません。また置かれている環境によっては育児のためにすぐにでも仕事を得ることが必要になりますが、新型コロナウイルス感染症による深刻な打撃を受ける社会の中で、仕事を得、十分な子育てができるのでしょうか。中高生の「望まない妊娠」の周囲には、不安、孤独といった精神的な苦痛だけでなく、雇用不安、非正規雇用といった社会的問題も見え隠れしています。そして、そうした不安や問題がある中で、「まだ産まれてないいのち」の「生」と「死」が決定されてしまっているのです。

新型コロナウイルス感染症は、「子どものいのち」の問題と直結している。それほど深刻な状況であることを見つけることから始めていく必要があるのではないのでしょうか。